



典礼委員会担当司祭 菅原友明

今月のポイント

「主よ、いつくしみをわたしたちに」

「あわれみの賛歌」から

「いつくしみの賛歌（キリエ）」へ

私たちの心からの嘆き、切なる願い、そして、神への限らない信頼が込められた「主よ、あわれみたまえ」という言葉は、あまりにもしっくりりとなじんでいる祈りではないでしょうか。新しい式次第では、これが「主よ、いつくしみをわたしたちに」と変更されることになりました。この変更には二つの事情があるようです。まず一つは式文の口語への統一というこ

とです。現行のミサは口語で行われていますが、四つの賛歌、すなわち、あわれみの賛歌、栄光の賛歌、感謝の賛歌（聖なるかな）、平和の賛歌（神の小羊）の部分には文語体が残存していました。今回、これらの賛歌もすべて口語体に改められます。

それならば「主よ、あわれんでください」に変えればいいのでは、とのご意見もあるでしょうが、ここに二つ目の事情があるようです。詳しい経緯はわかりませんが、「あわれみ」という日本語が背負っている社会的意味合いが熟考されたことは推察できます。2015年の特別聖年の際に、日本語表記をめぐって「あわれみ」か「いつくしみ」かの議論があり、最終的に「いつくしみの特別聖年」と決まったことなども思い出されます。

今回の改訂の理由としては、「この賛歌がもつ、いつくしみに満ちた主をほめたたえるという特徴をふまえ、現行版の『あわれみ』を『いつくしみ』に変更しました」（※1）と説明されています。まさしく主はいつくしみに満ちた方です。特別聖年の際の教皇フランシスコの大勅書の言葉を思い起こしましょう。「いつくしみー、それはわたしたちの罪という限界にもかかわらず、いつも愛されて

いるという希望を心にもたらずもので、神と人が一つになる道です」（※2）。罪の自覚のうちにも主への信頼をいだいて「主よ、いつくしみをわたしたちに」と呼びかける私たちの「嘆願」が、そっくりそのまま主をほめたたえる「賛歌」になっていく妙味にこそ、主のいつくしみが躍如していると云えます。嘆願されるまでもなく無限のいつくしみを私たちに注いでいる主にとって、私たちの嘆願こそが即賛美なのです。

なお、この賛歌はラテン語規範版でも「キリエ、エレイソン」とギリシア語のままでも唱えられている箇所であり、今回の改訂では日本語ミサでも「キリエ、エレイソン」と唱えることも可能となります。タイトルも「あわれみの賛歌」から「いつくしみの賛歌（キリエ）」に変更されます。なお、ミサ曲を歌唱する場合はこれまで通り、「主よ、あわれみたまえ…」と歌うことができます。

※1 カトリック中央協議会『新しい「ミサの式次第」と第一〜第四奉献文」の変更箇所』24頁（傍点は筆者）

※2 同『イエス・キリスト、父のいつくしみのみ顔ーいつくしみの特別聖年の大勅書ー』6頁（第2項）